

# 日本図の変遷 ～赤水から伊能へ～

小野寺淳 平井松午

……9

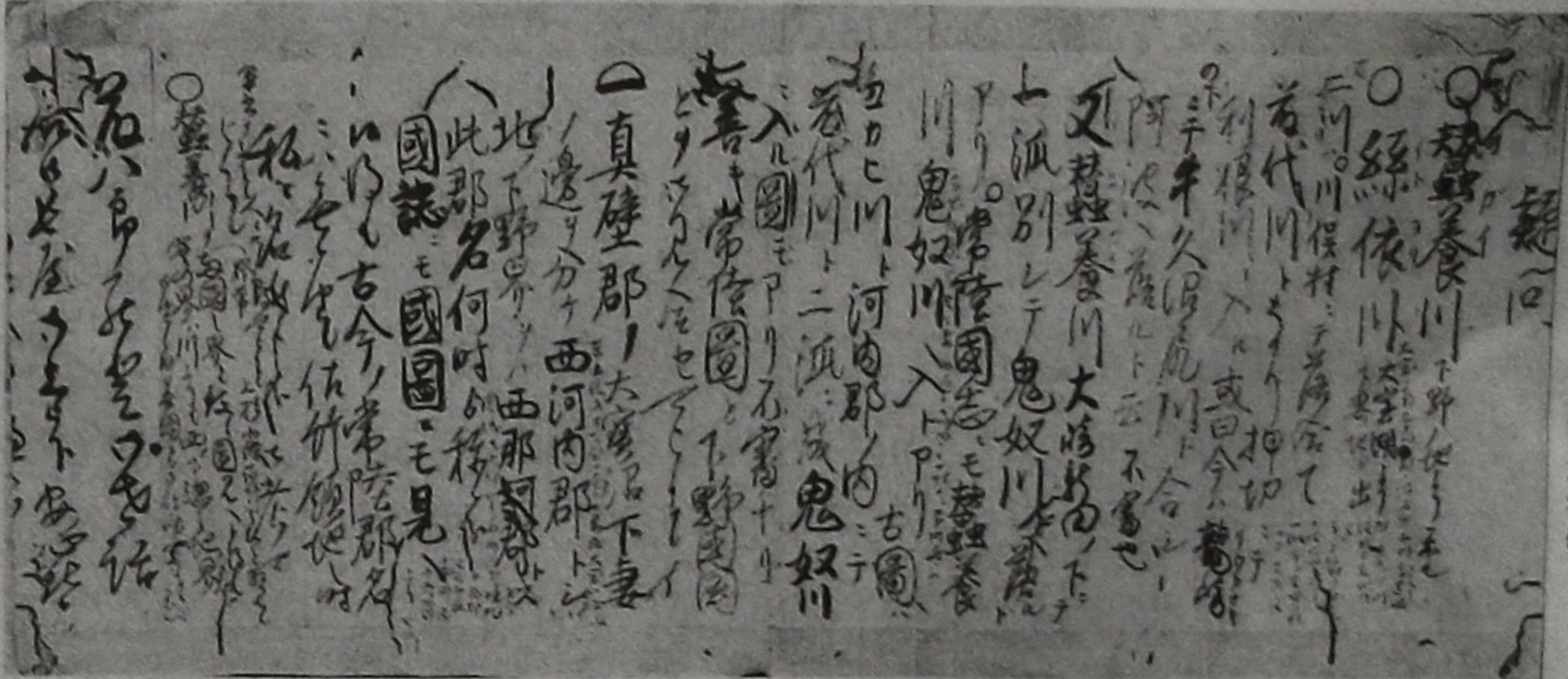
下北半島の図形以外にも、安永版の赤水図では利根川水系の流路、瀬戸内海の島々と干拓などにも赤水は修正を加えている。なかでも江戸前期の下総国と常陸国の国境となる鬼怒川と

## 疑問！ 常陸国と下総国の国境

小貝川の流路について、赤水は判断に苦慮していた。武士身分としては赤水より上の門人立原翠軒たちばなすいけんに宛てた赤水の書状「小貝川、鬼怒川の地理的疑問につき」（茨城県立歴史館所蔵立原家文書）では、丁寧ていねいに小貝川と鬼怒川の流路に関して翠軒に問い合わせている。

当時、水戸徳川家では彰考館に保管されていたであろう江戸幕府撰正保常陸国絵図の控え、ならびに寛文再提出図の控えが見いだせなかったようである。伝来する江戸幕府撰元禄国絵図（国立公文書館所蔵）で示すと、北から鬼怒川沿いであつた国境が、ある所から小貝川沿いになっている＝写真①。この理由は、常陸国と下総国の境は騰波ノ江とかつて呼ばれ、「鬼怒川と小貝川が合流して一つの流れをなしていたためではなからうか」と赤水は疑問を抱き、これを確かめるために立原

長久保赤水書状「小貝川、鬼怒川の地理的疑問につき」（茨城県立歴史館蔵）



翠軒に書簡を送ったようである。

その後、正保常陸国絵図をベースにしたタテヨコ四分の一の模写本が数多く写されていく。石井智子氏（茨城県立高校教諭）によれば、全国で六十三鋪も現存するという。このうち、赤水の門人立原翠軒に学んだ小宮山楓軒は、手書き彩色正保常陸国絵図（同県立図書館蔵）を一八一四（文化十一）年六月十三日に写した。

この図には「西澤散人大江廣安識」と記載され、大江廣安の図を小宮山楓軒が写したものである。大江廣安は、水戸藩の郡奉行であつた雨宮端亭とされる史料もあり、雨宮端亭もまた赤水の学問的影響を受けた人物の一人であろう。このように赤水の日本図作製は、常陸国に限らず、日本の地理に関するさまざまな疑問を巻き起こしたのかもしれない。

（おのでら・あつし＝放送大茨城学習センター所長）

